

わがまち自慢

村長室から



北海道とまりむら泊村
牧野ひろおみ浩臣 村長



「漁業とエネルギーのまち」として

今年も「群来まつり」を開催しました。これは昭和47年から45回続く我が村のお祭りになっています。盃温泉郷の海岸を会場にして、昼間はウニやホタテの採り放題、夜は歌謡ショーや花火など、多くの方々に喜んでいただいております。今年は約3,700人の来場者で、道内だけでなく、本州からもキャンピングカー等で来られていたようです。村民にとっても夏の「お楽しみ」のひとつになっています。

「群来」とはニシンの大群が、春先に産卵のために沿岸に押し寄せてくるさまを言いますが、私たちはこれを「群来る」と表現します。ご存知のように、明治から昭和の中期にかけて、積丹半島や石狩湾にニシンが押し寄せる「鯨群来」があり、空前のニシンの豊漁が続きました。私たちの村もニシン漁で賑わい、最盛期には50を超える「鯨番屋」が建ち並び、莫大な富をもたらししました。

往時の様子は、村営資料館『鯨御殿とまり』で偲ぶことができます。この施設は、明治27年に川村慶次郎氏が建てた「旧川村家番屋」と、大正5年ごろに武井忠吉氏によって建てられた「旧武井邸客殿」で、村に残っていた建物を移築して資料館としたものです。とても豪壮なもので、どちらもニシン漁がもたらした繁栄ぶりがよくわかります。ぜひ一度訪れていただきたいと思います。

当時の名残りは、「袋漕」というものにも残っています。これはプール状にした石造りの小さな港のようなものです。波の高い時期の漁のため、安全にゆっくりと水揚げするために、また、豊漁で陸揚げできないニシンを、ここで一時的に保管しました。これによってニシンの漁獲高は急上昇したといわれています。

日本海の海岸線が織り成す雄大な風景



村内に残る「袋漕」

「カブトライン」の景観

盃温泉郷の夕日

日本海に浮かぶ奇岩や断崖の織り成す景観も自慢のひとつです。通称「カブトライン」は、カブト岬などの奇岩や断崖絶壁が国道229号に沿って連なり、ニセコ積丹小樽海岸国定公園に指定され、「後志十景」のひとつに数えられ、観光ルートとなっております。

道内のスキューバダイビングのスポットとしても知られているように、最近、村内にダイビングの唯一の屋内スケートリンクを持つ



手配をするカフェも誕生しました。特に夕日の美しさは格別で、村内の施設「カブトラインパーク」からカブト岬に落ちる夕日は絶景です。ここ「カブトラインパーク」にはパークゴルフ場やバーベキュー施設もあります。利用料が格安なこともあり、村外から多くの利用者を訪れていただいています。

また、私どもは、1年を通じてスケートが楽しめる、後志管内で唯一の屋内スケートリンクを持つ



「鯨御殿とまり」の旧川村家番屋の漁夫だまり

和29年頃を期に「鯨群来」が現れなくなり、北海道のニシン漁は衰退してしまいました。私たちの誇るべき歴史遺産になっています。私どもの村は、道内最古の炭鉱「茅沼炭鉱」があつたところでもあります。安政3年に発見され、官営事業として開発が進められました。その後、明治16年に一旦廃止されましたが、ニシン漁の発展にともない、釜ゆでの燃料にするため石炭が必要となり、明治17年に採炭が再開されました。その後、エネルギーの主役が石油に移っていく中で、「茅沼炭鉱」は昭和39年に閉山となりました。ニシン漁と炭鉱は密接な関係にあつたわけで、昔から「漁業とエネルギーのまち」でもありました。

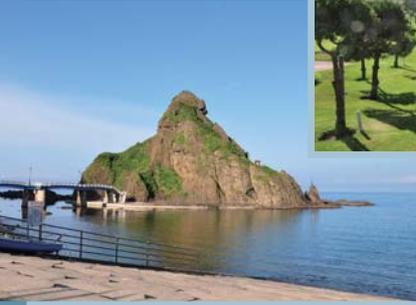
「茅沼炭鉱」があつたところでもあります。安政3年に発見され、官営事業として開発が進められました。その後、明治16年に一旦廃止されましたが、ニシン漁の発展にともない、釜ゆでの燃料にするため石炭が必要となり、明治17年に採炭が再開されました。その後、エネルギーの主役が石油に移っていく中で、「茅沼炭鉱」は昭和39年に閉山となりました。ニシン漁と炭鉱は密接な関係にあつたわけで、昔から「漁業とエネルギーのまち」でもありました。



「鯨御殿とまり」の旧武井邸の豪壮な造り



「カブトラインパーク」はパークゴルフ場やバーベキュー施設を持つ



アイスホッケー公式国際競技規則に沿って設計されている「とまりリンク」。写真はショートトラックの合宿風景



「とまりリンク」内のトレーニングルーム

います。これは、平成8年に旧泊小学校を活用した施設です。愛称は「とまりリンク」。アイスホッケー公式国際競技規則に沿って設計されており、平成10年のオープン当初より、1年を通じてプロや社会人はもとより小学生から大学生まで、数多くのチームに合宿や練習でご利用いただいております。おかげさまで、特に夏場に限っては、リンクの使用スケジュールがいつぱいになってしまっほほどです。

平成21年には(財)日本アイスホッケー連盟より「選手特別強化協力拠点」に指定され、翌年にはショートトラック全日本チームの強化合宿が行われました。その後も、ショートトラックチームのみならず、近年ではフィギュアスケートチームなどの合宿の場として、アイスホッケー同様、ご利用いただいております。施設内にはトレーニングルームや体育館、シャワー室も設けてあり、村民をはじめ近隣町村の方々に、年齢を問わず健康づくりの場として活用されております。このリンクでは毎年、「泊村長杯選抜少年アイスホッケー大会」の他に「泊村長杯長ぐつアイスホッケー大会」も開催しています。これは北海道釧路町が発祥の、長ぐつを履いてプレーするアイスホッケーで、スケートが滑れなくても楽しめるものですが、近年人気が高まっております。泊村にお越しの際はぜひ体験してみてください。

水産業と商工業・観光業が一体となった 基幹産業を育成

私どもは漁業のまちでもありませんので、マス、イカ、ウニ、アワビ、ホッケ、サケなどの魚介類は豊富です。最近ではブリも水揚げされており、村内の民宿では、季節ごとにこうした美味しい魚を食べることもできます。

ただ、漁業を取り巻く状況は厳しく、「育てる漁業」の必要性から、「地方創生事業」の一環として国からの支援を受けて、岩内漁協と古宇郡漁協が共同でナマコの増殖事業を行っています。

また、古宇郡漁協の、「栽培漁業センター」では、ウニとナマコの育成を行っており、中国や韓国に輸出しています。このセンターは平成3年に整備したもので、毎年200万粒のウニの種苗を生産しております。

さらには、古宇郡漁協では船主たちの法人化の動きもあります。漁業の後継者対策が急務ということで、現在、就労体験などで若い人が3人札幌から来ており、なんとか漁業の跡継ぎを確保したいと思っております。

この積丹半島の海は、魚種が豊富なところで、泊村の沖合はイカの産卵場所として知られています。また、昨年は小樽や余市でニシンの「群来」がありました。

同じ原子力立地市町村である愛媛県の伊方町と姉妹提携で、『泊の宴』という日本酒を造っています。伊方町の名産であるクリを原料の一部に使用した「栗焼酎」も開発しました。

ウニやイカ、ホッケなどの加工品も特産品となっております。私どもの村へお越しの際は、ぜひお土産にご利用ください。

その意味で、私どもは水産業と商工業、観光業が一体となった基幹産業を目指しています。雇用の

連携を密にした「岩宇4町村」で 地域振興を推進

人口減少・高齢化の時代では、これからの地域振興は、1つの自治体だけではできないと考えています。お互い切磋琢磨できるような近隣町村が一体となって組織化して進まなければと思います。

私どもは、昭和52〜53年頃から岩内郡の岩内町と共和町、古宇郡の泊村と神恵内村で、「岩宇4町村連絡協議会」を発足させて、札幌、小樽などで特産品の販売などを行ってきました。今年になってから、道の支援で「岩宇まちづくり連携協議会」が発足しました。

場の確保と生活環境の整備を重点的に行い、交流人口、定住人口の増加を図っていきたくと思っています。

4町村の観光資源の発掘や、当地グルメの開発などを具体的に行動するというものです。また、国の支援事業である「自慢づくりプロジェクト」でも、私たち4町村で進めております。これらの事業のひとつのターゲットとしてニセコの外国人の誘客があります。ニセコは外国人に人気のエリアですが、「岩宇」の特産品や観光のPR口モーションを、岩宇4町村で行っております。これからのまちづくりは、4町村が一体となって進めていくこととなります。(談)



今年度開かれた「群来まつり」